

## モラロジー研究会 開催報告

令和6年1月24日(水)、モラロジー道德教育財団の生涯学習センター(研修館201教室)において、「廣池千九郎が後世に託した34項目の研究課題の検討 その3—社会科学を中心に—」をテーマに研究会(対面のみ)を開催し、研究員を含めて約20名が参加しました。

はじめにモラロジー研究推進プロジェクトのリーダーである宮下和大道科研副所長が34項目の検討に関するこれまでの経緯を踏まえて趣旨説明を行い、続いて道科研の大野正英研究主幹、梅田 徹客員教授の2名が各40分の報告を行いました。それぞれの報告テーマと要旨は、以下のとおりです。

### ①大野正英「経済学・経営学・社会学の観点から見た整理」

本発表では、廣池千九郎が後世に託した34項目の研究課題の中で、主に経済学・経営学・社会学に関係する課題として、(20)博愛科学、(21)セツルメント・ワーク、(23)労働問題の道德的解決、(29)道德的経済学ならびにモラロジーに立脚する新経済学、(30)人口問題・食糧問題・移民問題と道德の相互関係といった5つの項目を取り上げて、その意図するところと現代における学問的・実践的展開について考察を行った。その要点は以下のとおりである。

「博愛科学」と「セツルメント・ワーク」は、主として貧困問題の社会的解決に向けての取り組みにあたるが、現代では経済学や社会学を中心に貧困に関する研究が進められており、また現実の活動においてもNPOやボランティア活動などに発展的に継承されている。労働問題については、廣池の時代と状況が大きく変化し、労使の激しい対立という状況がなくなった一方で、ワーキングプアや過重労働などの新たな課題が生じており、特に企業側の姿勢が大きく問題視されている。新たな経済学については、主流派経済学の理論構築において課題と限界があることは認めるが、同時にその現実的有効性については評価すべきであると考え。その上で正義をめぐる議論や行動経済学における非利己的な動機の議論、ソーシャル・キャピタル論などの新たな動きが評価でき、同時に経営学における経営倫理に対する取り組みの広がりも廣池の目指した方向に合致していると言える。人口問題・食糧問題・移民問題については、人口の増加から減少へ、食糧の不足から過剰へ、移民の送り出し国から受け入れ国へとといったように、廣池の当時と日本の状況が逆転していると同時に、そこに新しい道德的課題が生じてきている。

以上全体を振り返ると社会状況が大きく変化しており、廣池の議論が現在にそのまま適用できるわけではないが、形を変えて道德的問題は現在にも残っており、人間や社会の本質に関わる問題として廣池が指摘した課題は現在においても非常に重要な意味を持つ。

### ②梅田 徹「法律学・政治学・平和学の観点から見た整理」

本発表では、「(22)法律学の原理(正義)と諸聖人の精神(慈悲)との調和及びその応用

に関する具体的方法の研究、(24) 政治学及び法律学の原理に関する徹底的研究及び政党の  
道徳化に関する具体的方法の研究、(25) 世界永遠の平和の実現に関する具体的方法の徹  
底的研究」の3つの課題を扱った。

(22) では、廣池博士が「正義」と「慈悲」をどう捉えていたかをレビューし、現代に継  
承する必要のある課題を抽出する一方、「応用」の事例を紹介した。(24) では、当時の政治  
学の法律学からの未分離という背景もあり、政治学の原理も法律学同様、「正義」であるこ  
とが確認された。また、学問に関する「正統」「異端」の是非を議論した。(25) では、廣池  
が説いた「平和」の内容を吟味し、平和の思想と実現プロセスに触れ、廣池博士の平和の実  
践を紹介した。

各課題に関連する学問の現代的な展開状況にも言及した。また、新たな課題として、精神  
科学(道徳領域)を中心として、分節化された社会科学の各領域(経済学、経営学、社会学、  
法律学等)を有機的に結びつけるようなモラルサイエンスを打ち立ててはどうかと提案し  
た。

その後の質疑応答、全体討論では、廣池が『道徳科学の論文』で用いた訳語の妥当性につ  
いて、廣池の時代から現代までの学問の進歩と時代の変化にどう対応するか、などの視点か  
ら多くの質問が出され、活発なやり取りが行われました。

(文責：モラロジー研究推進プロジェクト サブリーダー 宗 中正)